

ながさき人紀行 120

西亮さん(59) しんとう 滲透工業社長

技術開発が生命線。研究室で社員と熱く意見を交わす  
 =西彼時津町、滲透工業本社（大櫛格撮影）

## 「無用の用」を原点に 技術開発たゆまぬ探求

### 約

20年も前の1991（平成3）年、本県経済界の貿易・投資視察団に同行し、経済成長著しいインドネシアに進出して間もない滲透工業の合弁会社を訪問したことがある。

鉄鋼を製造する上で欠かせない酸素吹き込み用管（ランスパイプ）の製造、販売で既に国内最大手のメーカーだった。約40人のインドネシア人が働く姿を取材したが、活気あふれる生産現場が印象的だった。

欧州、アジア2カ所に生産拠点をもち、技術立社を掲げるベンチャー企業である。

「残念ながら弊社の製品は皆さんの目に触れることがない。多くは基盤技術を支える必須のアイテムで、裏方に徹した仕事です」。鉄鋼や自動車業界が主要取引先。ランスパイプや自動車エンジンなど高速回転する金属部品の表面処理を手掛ける。確かななじみが薄い。

そこで西は、持論の「無用の用」を挙げて「縁の下の力持ち」の意義をとつとつとして語る。

室内に直線に並べて敷いた1枚30センチ四方の床材の通路を真っすぐ歩くのは簡単だが、上空100メートルで同じ幅の通路を歩くのは至難の業。「室内で簡単に歩けるのは、通路の周りの

床が安全を保障する『無用の用』をなしているからだと思います」

製品は、故障がないのが当然のように品質への要求は高く一層、高度化される。絶えず付加価値や新技術を生み出し続けなければ、製品や技術はいつしか価値が下がる。

そこで、「モノ作りに一番大切なことは、常に1ミリでも1センチでも目標に向かって自らを高める『無用の用』をなせる人づくりです」。西の人となりを知る上でも興味深い、ユニークな話である。滲透工業ならではのだろう。

40歳で社長となり20年になる。53（昭和28）年に父淳まことが興した会社は来年、創業60年を迎える。西の足跡、実は父と息子の「父子物語」でもある。

### 福

岡で生まれ、父の起業で間もなく長崎に移り住む。従業員10人ほどの町工場。自宅は家野町、工場はすぐ隣の若葉町。就学前は事務所の2階が住家だった。

「工場の中で育ったようなもの。おもちゃを片っ端から分解しては元通りに組み立てるのだけども。理科や工作が好きだった好奇心旺盛な子ども時代、長崎大付属小、同中に通う。「おとなし

く目立たなかったかな」

当時、自宅の応接間でよく役員会を開いていた。「大の大人が台所のコンロでなにやら加熱し実験」。そんな記憶がありました」。そして中学2年時、父の散弾銃から盗んだ鉛弾を台所のコンロで溶かし石こうの鑄型に流したところ、水蒸気爆発を起こした。なんと、父たちが台所でしていた実験がヒントだった。

やけどで顔中ばんそうこうだらけ。それはもう母からこっぴどく叱られた。だが、父は違った。「むしろなぜ爆発したのか、鑄型は乾燥してないと爆発や鑄造欠陥の原因になる。子ども相手にわかりやすく教えてくれました」

家庭が環境が人をつくる。父の存在は大きかった。

父は戦前、三重県の技術者だった。収益の柱「ランスパイプ」は、彼が福岡時代に開発した技術を長崎で開花させたのである。世界10カ国で特許を取得し、京阪神に製造拠点を置き発展の道を歩み始めた。

73年の石油ショック。企業の売り惜しみ、便乗値上げで社会は騒然とした。父は、業界の大幅値上げに同調しなかった。小幅値上げ策が奏功し不

あった。日本の進出企業が少ないころである。「上司の物見遊山的で無責任な態度やイエスマンではやれない」と思い、自分から手を挙げたんです」

85年、33歳で取締役となりイタリア副社長として5年間、欧州に滞在。製造、技術面を担当しながら、北欧や英国などでは自ら営業にも奔走した。もともと、休日はゴルフにテニス、夏はヨット、冬はスキー。「レース艇ヨットで湖のクルージングなど満喫した。日本ではとてもできない体験でした」

苦い経験もある。一時帰国途中、社員がけがをする労災事故が発生していた。長崎に戻ると、社長から「事故ばい」。「責任者として情けない、悔しい、申し訳ない、涙が止まりませんでした」。以来、重大事故は皆無だという。

父は90年会長職に退く（98年死去）。生え抜きの幹部がバトンを継ぎ、3年後に3代目社長になる。

2004年、ランスパイプ製造を発祥地の長崎工場から福島県いわき工場に全面移転した。円高による価格競争、製鋼技術の発展など厳しい環境にも直面した。「自らが変わらなければ対応できないと、断行しました」

況をいち早く克服し、その経営手腕が目目された。

「ただもうかるといっただけでは手を出さない。難しい問題を解きお客から喜ばれる。そんな仕事ぶりだったようです」。研究者肌で独特な経営理念・哲学の持ち主だった。

このころ、西は長崎西高から千葉工大工学部に進学、金属工学を専攻した。

本社・長崎工場は74年西彼時津町久留里郷に新設移転する。

さて西は75年、卒業すると迷うことなく滲透工業の門をたたいた。そのまま東京工場（当時）に6年間勤めた。「朝8時からの24時間勤務。工場長から厳しく鍛えられました」

## 本

社勤めとなり、長崎工場技術課長時代、イタリア・ミラノ近郊に工場建設の計画が

もともと、全面移転後の大きな穴を埋めるため、新たな部門創設に抜かりはなかった。「営業、技術両部門総出で顧客開拓と用途開発に奔走した。それが弊社です」

08年秋は、リーマン・ブラザーズが破綻した「リーマン・ショック」である。初めて全従業員の一部帰休に踏み切った。「外的な要因を契機に、残業をしない定時間作業を徹底、厳守した。図らずもその後の生産性向上、収益アップにつながりました」

創業以来、工業所有権の取得には積極的である。内外で126件の権利を獲得してきた。「特許権の保護期間は20年で既に80件が消失した。常に新しい製品、技術、用途開発が不可欠ということ。何と言っても『無用の用』がキーワードの人づくりです」

今秋、高校の還暦同窓会があり、昔取ったきねぶかでドラムをたたく。ヨットクルージングも1級免許を持つ。「当時のバンド仲間と新たな青春万歳です。クルージングはイタリア時代の副産物。もちろん社員も乗せてます」。思わず頬も緩む。技術立社のトップは、趣味も多彩のようである。

（蓑田剛治）



イタリア工場勤務時代、サッカー部の社員と記念撮影（前列左から2人目）=1986年11月

### 略歴 にし・まこと

1952（昭和27）年9月14日、福岡市生まれ。千葉工大卒、75年滲透工業に入社。東京工場を皮切りに長崎工場技術課長、取締役事業部長から84年、イタリアの合弁会社副社長として5年間勤務。帰国後、常務、専務を経て93年から社長。イタリア、インドネシアの両合弁会社でそれぞれ社長、常務を務める。2006年、中小企業庁の「元気なモノ作り中小企業300社」に選ばれる。08年から長崎工業会会長、10年から県中小企業団体中央会副会長。